

---

# ソニック・ザ・ヘッジホッグ「エメラルドの暴走」

こた

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ソニック・ザ・ヘッジホッグ「エメラルドの暴走」

### 【Nコード】

N2548Y

### 【作者名】

こた

### 【あらすじ】

いつものようにソニックとエッグマンは戦っていた。ソニックが七つのカオスエメラルドを使いスーパーソニックへ変身し、誰もが勝負はついたと確信した…

しかし、異変は起こった。

突然暴れ出し、ソニック達を攻撃するカオスエメラルド。一体カオスエメラルドになにが起こったのか？

そして、禍々しい暗黒色のハリネズミ——「ダーク・ザ・ヘッジホッグ」。

彼の目的は？そしてその正体は？

ソニック達の新たな冒険が始まる！

はじめまして♪ことと申します。

初投稿です。

よろしくお願いします？

## ■ Character introduction ■ (前書き)

ソニックをご存知ない、もしくはあまり詳しくないお方もいらっしゃると思うので、一応キャラ紹介をします。

## ■ Character introduction ■

【ソニック・ザ・ヘッジホッグ】（主人公）

種別 ハリネズミ

年 15歳

□特徴

- ・ 全身が青い
- ・ 大きな白い手袋
- ・ 赤いスニーカー
- ・ 大きなトゲ（数本）

□特技

- ・ 超音速で走ること
- ・ スーパー化

（スーパー化とは、七つ集めると奇跡を起こすと言われている「カオスエメラルド」のパワーを取り込んでパワーアップすること。通常時を遥かに超える能力を有し飛行も可能だが、極端にエネルギーを消費するため短時間しかスーパー化を維持することが出来ない。）

自由気ままが大好きで曲がったことが大嫌い。短気なところがあるが、困っている人は放っておけない優しさを持つ。約束は守り、絶対に裏切らない。ただし、じっとしていることや水は苦手という欠点もある。

【マイルス・パウア】（通称 「テイルス」）

種別 キツネ

年 8歳

□特徴

- ・全身が黄色い
- ・大きな白い手袋
- ・大きな2本の尻尾

#### □ 特技

- ・尻尾を回転させて飛ぶ
- ・機械いじり

心優しい子ギツネ。過去に尻尾が二本あることでいじめられていたが、ソニックの走る姿を見て勇気づけられ、彼の後を追いかけることになった。機械いじりが大好きで、その能力を活かしソニックをサポートする。

#### 【ナックルズ・ザ・エキドゥナ】

種別 ハリモグラ  
年 16歳

#### □ 特徴

- ・全身が赤い
- ・手が大きく、手の甲に二本のトゲが付いている

#### □ 特技

- ・穴掘り
- ・壁登り
- ・滑空

ソニックの喧嘩友達で良きライバル。「マスターエメラルド」という不思議な力を持つ大きなエメラルドの守護者。生真面目であるため、よくエッグマンに騙されることも。トレジャーハンターでもある。彼の拳は強力で、大きな岩も軽々と破壊できる。

【Dr・エッグマン】

種別 人間

年 不明

□特徴

- ・ 体型が卵の様に丸い
- ・ 目に小さく丸いサングラス（と思わしきもの）をかけている

自分勝手にわがままな「自称」悪の天才科学者。IQ300と高い知力を持つが、人の迷惑を考えない。何度も計画をソニックに阻止されている。

【シャドウ・ザ・ヘッジホッグ】

種別 ハリネズミ

年 不明

□特徴

- ・ 全身が黒い（赤い箇所もある）
- ・ 見た目がソニックと瓜二つ
- ・ 走る時は地を蹴って走るといふより、靴から出る空気でスケートのように滑走する様に走る。

□特技

- ・ 音速で走る
- ・ カオスコントロール
- ・ カオスブラスト
- ・ カオススピア
- ・ スーパー化

「Dr・エッグマン」の祖父にあたる世紀の天才科学者「プロフェッサー・ジェラルド」によって生み出された究極生命体。「カオス

エメラルド」を使い、時空を歪ませることが出来る『カオスコントロール』の力を与えられている。

【シルバー・ザ・ヘッジホッグ】

種別 ハリネズミ

年 14歳

□特技

- ・ 超能力を使って物を動かし、それを投げて攻撃できる
- ・ ESPによる飛行
- ・ スーパー化

荒廃した未来を変えるべく、未来からやって来たハリネズミ。様々なサイコキネシスを使う。

【ダーク・ザ・ヘッジホッグ】（オリキヤラ）

種別 ハリネズミ

性別 男

年 ？

今回の事件の主犯。カオスエメラルドを操る能力を持つ。シャドウの行方を追っているが、目的は不明。

【ハイク】（本名は不明）（オリキヤラ）

種別 ハリネズミ

性別 男

年 ？



朱色の体を持つハリネズミ。見た目はソニックと少し似ているが、頭に大きな毛が立っている。（本人は少し気にしている。）記憶を失っているが、正義感が強く熱い。銃使いであり、その腕前はかなりのもの。ただし、ムキになると危険な銃弾を使うが本人はそれを危険と感じない。また、なかなかの俊足。

【エミー・ローズ】

種族 ハリネズミ

性別 女

年 14歳

「自称」ソニックのガールフレンド。今回もソニックを追いかけているが……。

## ■Character introduction■(後書き)

□参考 ソニックチャンネル(公式HP)

## Prologue

見渡す限り広い草原が広がっている――――

草原の真ん中で「彼」は昼寝をしていた。

太陽が少し眩しい。

だが、そよ風が心地良い。

近くで小河が流れている。

水の流れる音が心を静かにする。

チチチ――

小鳥のさえずりが聞こえる。

なんて……平和なんだろう……

穏やかな表情を浮かべ、「彼」は目をつぶりながらそう思っていた。

「彼」は朱色の体をしており、背中には数本の大きなトゲがある。  
また二本の大きなベルトを身に付けており、片方は腰に、またもう  
片方は無造作に肩にかけていた。

大きな草が生えているところで、「彼」は少しウトウトしていた…

その時

「ん………？」

空で起きている小さな異変に気づき、「彼」はゆっくり目を開ける。

「……！？」

「彼」は驚いて体を起こした。

少し目を疑った。

「彼」の寝ている場所だけ日陰になっている。

しかし空に雲は一つもなく、周囲にもその要因となるような物はなかった。

「な……なんだこれ………」

「彼」は小さく呟いた。

その時空に気配を感じ、「彼」は空を見上げる。

「違う……シャドウ・ザ・ヘッジホッグじゃない……」

どこからか不気味な声が聞こえた。

「誰だっ!？」

「彼」は空を見上げたまま腰のベルトに装着していた拳銃二丁を取り出した。

「……まあいい、教えてやろう……」

シューウウウウウウウウウウ……!!

声のする方に禍々しい黒い煙のようなものが集まった。

鳥達はこの存在に気がついたのか、皆飛び去っていった。

その煙はだんだん一匹のハリネズミとなった。

そのハリネズミはゆっくりと地上に降り立つ。

サクッ———

草を踏む音が少し大きく聞こえた。

「俺の名は……ダーク。ダーク・ザ・ヘッジホッグだ。この世の唯一にして究極の存在……」

静かな物腰でこそあるが、海の底のように冷たい群青の瞳と漆黒で背中に悪魔のような翼の生えた体を持つハリネズミ——ダークは不敵にそう言い放った。

「……あんたが俺に何の用だが知らないが……究極の存在だって？ ハッ！ 笑わせるな。悪いが俺にはあんたが究極の存在だなんてちっとも思えないね。」

チャキッ！

「彼」はダークに二丁の銃を構えながら言った。

「……貴様に用は無い……だが、折角だ。俺が究極の存在である証拠を見せてやろう。」

ザッザッザッザ……

ダークは不気味な微笑みを顔に浮かべながら、「彼」に向かってゆっくり歩き始めた。

「来るな！」

ダンッ！ダンッ！！

「彼」はダークに銃を撃った。

ビシッ！ビシッ！！

「なっ……！！！」

弾は当たったが、ダークは表情一つ変えずに近づいてくる。

「これならどうだっ！」

ジャキッ！

「彼」は一旦銃を下のホルダーに戻し、背中から先程の銃よりも数段威力の高いグレネードランチャーを取り出した。

「行っけえ——!!」

ドンッ! ドンッ!! ドンッ!!!

「彼」はダークに向かってグレネードを三発撃った。

ドガ——ン!!!

グレネードはダークに命中し爆発した。

その衝撃で周りの草が燃えているのが分かる。  
しかし、ダークの姿は噴煙で見えない。

シュ~~~~ッ……

煙が大分引いてきた。



「……っ な！なんだとっ！！？」

「彼」は自らの目を疑った。

彼の周囲こそ惨状と化していたものの、ダーク本人は無傷だった。

その上未だにこちらに向かってゆっくりと歩き続けている。

「くっ、くっそお——！！！」

ダッ！！

「彼」は走り出した。

「俺の足の速さをなめるなよ！！お前なんかには追いつけるものか！！」

「彼」は走りながら振り返った。

「……っ な！？」

さっきまでダークが居た場所にダークは居なかった。

「言っただろう…？この世の絶対にして究極の存在だ…と。」

「!?!」

「彼」は正面に向き直った。

そこには片手を「彼」に向けているダークが居た。

「やっ、やばい!!」

このスピードだと止まらない!!——

ダークの手に紫色の光が集まる。

「……消えろ」

ドンッ!!

ダークの手から黒い閃光が迸った。

ズガアアッ

「うわあああああっ!!!!」

「彼」はビームに直撃し、空中に投げ出された。

ドザッ!!

「彼」は地面に叩きつけられ、意識を失った。

「……フン。」

蔑むように嘲笑うとダークは姿を消した。

????????????

「……………」

太陽が西へ沈もうとしているとき、「彼」はようやく目を覚ました。

「彼」はよろよろと立ち上がった。

「ガッ!!?」

「彼」は再び倒れそうになった。

全身に負った怪我が鋭い痛みとなって彼の体に奔った。  
砂嵐に見舞われたように目の前が霞む。

「……………ここは……………どこだ……………?」

## SONIC VS EGGMAN

ドガンー！！

ヒュ~~~~~：ドーン！！！！

何発もの爆音が響く。

ここは自分勝手にわがままな「自称」悪の天才科学者、Dr. エッグマンが作った基地の中だった。

基地の中は昼間であるにも関わらず、少し薄暗く感じられた。基地内の司令塔のような大きな建物が不気味にそびえ立っている。

名前の通り卵のような体をしているエッグマンは、毎度のように自分が作った大きなロボットに乗り「彼」を追いかけていた。

「待~~~~え~~~~！！」

エッグマンはロボットを操縦しながら叫ぶ。

「COME ON！！」

「彼」——ソニックは走りながら言った。

音速で走り回る青いハリネズミ——ソニック・ザ・ヘッジホッグ。大きな白い手袋と赤いスニーカーが特徴的な彼は、何度もエッグマ

ンの手から世界を救ってきた世界最速のハリネズミである。

「くうくう!! 忌忌しいハリネズミめ!」

エッグマンがミサイルを撃ちながらソニックを追いかけていた。

ヒュ~~~~~ドーン!!!

ミサイルがソニックに向かって飛ぶが一発も当たらず、全て壁や床に当たる。

「へへっ! 遅い攻撃だなエッグマン!」

ソニックは走りながら叫んだ。

「だまれ!! くうくう! 当たれ!!」

ソニックはロボットの攻撃をスイスイ避けていく。

その時

ドカーン!

「むうっ!?!」

何かがロボットを攻撃した。

「ソニックー!!」

ブ~~~~ン!

その正体は愛機の小型飛行機・トルネードに乗ったテイルスの放ったミサイルだった。

彼は二本の尻尾を持った黄色の子ギツネで、ソニックの良きパートナーである。

「ソニック! 援護するよ!!」

テイルスは操縦席から笑顔を見せながら言った。

「THANKS!!」

ビッ!

ソニックはテイルスに親指を立てた。

「忌忌しいのが二匹になりおったワイ! こうなったらフルパワーじ

や!!！」

ガチャッ、ガチャッ!

ギューーーーン!!

ロボットは変形しさらに大きくなった。

「へへっ、そうこなくっちゃ!」

ソニックは余裕たっぷりにほくそ笑んだ。

「その余裕もそこまでじゃ! 覚悟しろい!!」

ゴオオッ!!

ロボットのスピードが上がった。

「俺に追いつけるかな?」

バビュンッ!!

ソニックもさらにスピードを上げた。



「喰らえい!!」

ドドドドドドドドドッ!!!

ロボットの全身からミサイルやマシンガンなどが一斉に撃たれた。

「ヒュ♪COOL!!」

ソニックは全て避けながら言った。

「くらえー! エッグマン!!」

ドンッ! ドンッ!!

ドガン!!

テイルスはエッグマンのロボットに二発、大きなミサイルを撃ち込んだ。

それらは見事に命中した。

「のわっ!？」

エッグマンはひるんだ。

「ハアッ!!」

ド——ンッ!!

その隙にソニックはロボットにホーミングアタックをした。

「きかぬわっ!!」

ギュワァ——ン!!

バキィッ!!

ロボットは勢いよく回転し、ソニックを弾き飛ばした。

「うわあっ!!」

ババッ!

ソニックは空中で体制を整えて着地した。

エッグマンはテイルスの方を見た。

「貴様の相手はこいつじゃ! ポチッとな!!」

エッグマンは何かのスイッチを押した。

ドドドドドドドド！

エッグマンのロボットから膨大な数のミサイルや追尾弾が飛び出した。

「そんなものでやられるもんか!!」

グオオオ——ン!!

トルネードは大きく旋回した。

——こうして僕達がエッグマンと戦うのは何回目だろう…?

テイルスはトルネードを操縦しながらそう思っていた。

「さうて、次は貴様の番じゃあ——!!」

エッグマンは再びソニックを追いかけた。

「COME ON!! COME ON!!」

ダッ!!

ソニックは逃げながら言った。

「ハッ!!」

シュンッ!!

ソニックの姿が消えた。

「なにっ!? ソニックめ、どこへ消えたっ!??」

エッグマンは辺りを見回した。

「ここさっ!!」

頭上から声がした。

「むうっ!?!」

エッグマンが上を向いた。

ギューイイイイ————ン!!!!

そこには回転しながら落下してくるソニック。

ドガ————ン!!

「のわあっ!?!」

ソニックはロボットの頭上に回転しながらアタックした。

「まだまだじゃあ——!!」

ギュー————!!

ロボットは再び回転を始めた。

「ぐあっ!」

ソニックは再び弾き飛ばされた。

ババツ！

ドガアン！！

ソニックは空中で体制を整え、壁を蹴りもう一度ロボットにアタックした。

「きかぬと言っとなるじゃろが！！」

ギユワ————！！

エッグマンはロボットを再び回転させ、ソニックを弾き飛ばした。

「うわあっ！！」

ソニックは空高く弾き飛ばされた。

「ホ————ホホホ————！！ソニックよ！貴様を倒すために新しくつくったこの「E—Z」はそう簡単に倒すことは出来んぞ————！！」

エッグマンは高笑いをした。

「さあーで、どうかなあー？」

ソニックは空中で不敵に笑いながら言った。

「ふんっ、貴様は「E―Z」を倒すどころか傷一つすらつけておらんぞ！」

エッグマンは憎たらしく言った。

その時――

キラアツ：

ソニックの周りに赤、青、黄、緑、白、水色、紫の光が現れた。

「さーで、これはなんででしょう？」

ソニックはにやけながら言った。

「んなっ……き、貴様、まさかっ!!!？」

エッグマンは叫んだ。

そう……ソニックの周りに現れたのは七つ集めると奇跡を起こすと  
言われている——カオスエメラルド。

ソニックは目を閉じた。

グオオオオオオッ！！！！

カオスエメラルドがソニックの周りを勢いよく回り始めた。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおつ！！！！！！！！！！」

ソニックの体が徐々に金色になっていく。

「やった！スーパーソニックだ！！」

テイルスはミサイルを破壊しながら嬉々としてそう叫んだ。



シュオオオオオオオッ!!

「ハアアッ!!!!」

ドンッ!!!!

ソニックはカオスエメラルドを取り込み神々しい金色の光を纏う――  
――スーパーソニックになった。

「さあーで、遊んでやるぜエッグマン!!!!」  
ソニックは宙に浮きながら余裕たっぷりに告げた。

「ぬおおおっ!!」  
エッグマンは焦りだした。



## SILVER VS DARK

一方その頃……ソニック達が戦っている場所から遙か離れた場所にある水の公国——「ソレアナ」に一匹のハリネズミが居た。

「ソレアナ」海上都市であり、以前ソニック達が長き戦いを繰り広げた場所でもあった。

「……ああ——！今日も平和だな——！」

ソレアナの街から少し離れた浜辺で1人ねっころがりながら大きく伸びをした銀色のハリネズミ——シルバー・ザ・ヘッジホッグは一人呟いた。

雪のような銀白の毛皮に身を包まれ、ブーツを思わせる少し丈の高い靴が彼の気高さを彷彿とさせる。

ザザ——ン……！！

潮の良い匂いがする。

海の潮風が、彼の白い胸毛を揺らす。

その時――

「……………」

彼は異変を感じ、静かに目を開いた。

しかし周りに誰もおらず、目の前には半透明の海、空にはカモメが飛んでいるくらいだった。

「……………気のせいかな。」

そう呟き、再び目を閉じた時――

「……………違う、こいつもシャドウじゃない。」

突然聞こえた不気味な声にシルバーは体を起こし、周りを見回した。

「誰だ!？」

シルバーは周りを見回しながら叫んだ。

「!？」

シルバーは上空に気配を感じ、空を見上げる。

「な、何だあれ!？」

気配のあるところに禍々しい黒い煙のようなものが集まった。

そしてそのまま一匹の漆黒のハリネズミになった。

「なっ!……お前は……メフィレス!!?」

シルバーは身構えながら言った。

確かにその姿はメフィレスに似ていた。

かつて荒廃した未来で自分を騙し、ソニックを殺させようとして全ての歴史の抹殺を企んだあの男

——「メフィレス・ザ・ダーク」に。

奴はイブリースと融合し、再び「過去・現在・未来」同時に存在する超次元生命体——「ソラリス」となった。

——だが、奴は俺とソニック、そしてシャドウと共に倒したはず。  
なのに何故……？

フワッ……

漆黒のハリネズミは無言で海の上に舞い降りた。  
彼の背中にある大きな黒い翼がバサリと音をたてる。

「……メフィレスとは誰の事だ？俺はダーク。ダーク・ザ・ヘッジ  
ホッグだ。」

そのハリネズミ——ダークは静かに言い放った。

「……この世の絶対にして究極の存在だ。」

「……それで、その究極の存在が俺に何の用だ？」

シルバーはダークを睨みつけながら言った。

「貴様に用は無いが……折角だ。俺の力を見せてやろう。」

スッ————

そう告げるとダークは静かに右の掌を左肩の方へやった。

そして掌に雷光の如く黒い光が集まる。

バチバチバチバチ————！！！！

「!?!」

シルバーは驚愕していた。

「ダークスピア！」

ビュンッ！！

ダークが腕をシルバーに向かって振り下ろすと、数本の黒い光の矢が一斉にシルバーに襲いかかった。

「無駄だ!!」

シルバーは両手を前に突き出した。

ピタッ！！

矢は全てシルバーの周りで青白く光り、静止した。

「……ほう。」

ダークは微かに驚いた表情を見せた。

「俺の超能力をなめるなよ！お返しするぜ！！」

ビュンッ！！

グオオオオオッ！！

シルバーがダークに向かって腕を振ると矢は全てダークに向かって飛んでいった。

ドガーーン！！

ダークに命中すると矢は爆発した。

シューウウウー——



煙が晴れると……

「なっ、何!?!」

シルバーは驚き目を見開いた。

薄れてきた煙の中にダークが無傷で浮いていたからである。

「これでどうだ!」

バツ!

シルバーは大きく跳躍した。

「くらえっ!!」

バリバリッ!!

シルバーはダークの近くに着地し、周りにサイコキネシスを放った。

バシユンッ!!

それは命中したものの、ダークは表情一つ変えずに浮かんでいる。

「……なかなかやるようだが、そんな程度で俺を倒す事は不可能。」

「なっ!？」

シルバーは自分の目を疑った。

「もういい……消えろ。」

静かに言い放つと、ダークは片手をシルバーに向けた。

グオオオオオオオオオオオオ!!

ダークの掌に黒い光が集まってきた。  
どれほど強い威力を発揮するのかは、その光の大きさを見れば一目瞭然だった。

その余派がダークの足元の海水を大きく揺らしている。

「くっ、くそっ!」

まずい、やられる————!

シルバーは防御体制に入り、目を閉じた。

その時――

ギユウウウウウウウ………ン

ダークの強大で禍々しいオーラが徐々に薄れていくのを感じた。

「……？」

シルバーは徐に目を開けた。

「……………」

ダークは無言で海の彼方を見つめている。

「……あっちに大きな力が……この力はカオスエメラルドか……？」

「カオスエメラルド……だと？」

シルバーは思わずそう尋ねた。

ダークはシルバーの方に向き返した。

「……今回は見逃してやる。次会った時は容赦無く消す。」

ギユウウウン！

そう告げるとダークはゆっくり上昇した。

「ハアッ！！」

ドシュッ！！

ダークは遙か彼方に飛び去っていった。

「……なんだったんだあいつは……？」

シルバーは呆然としたまま、そう呟いた。

「カオスエメラルド……何か嫌な予感がするが、このまま奴を放っておくわけにはいかない。」

ボワアツ…!

シルバーの体が青く光った。

ふわぁっ……

そしてそのままシルバーの体がゆっくりと宙に浮かんだ。

「ハアッ!!」

シュンツ!!

そして、そのままダークの消えた方へと猛スピードで飛び去っていった。

## SILVER VS DARK (後書き)

この話は「新ソニ」が終わってから約一週間程経った頃という設定で読んで頂けたら嬉しいです。

原作では「ソラリス」を倒した後はシルバーはもう未来に帰っていますが、今作ではシルバーはまだ未来に帰っていない設定です。

理由はご想像にお任せします(笑)

## STARTING OVER

戦いの場は再びエッグマンの基地に戻る……。

「どうしたエッグマン？ さっきまでの威勢はどこ行った？」

スーパーソニックは宙に浮かびながら余裕たっぷりと言った。

「ぐ、ぐぬぬ……」

エッグマンは悔しそうな表情を見せている。

カオスエメラルドの力を使いパワーアップしたスーパーソニックは、エッグマンのロボットを圧倒的な力で攻撃し続けた。連続攻撃を受け、ロボットは既にボロボロであった。

「このまま一気に終わらせてやる……！」

ソニックは叫んだ。

「く……く、くそ——！ 果たしてもワシの計画を邪魔しおって——！！」

エッグマンは最早なす術がなかった。

~~~~~

その頃、ソニック達の居る場所より遙か上空に一匹のハリネズミが居た。

「……シャドウに似ているがシャドウじゃない。奴は一体何者だ……？ まあいい、どうやら奴はカオスエメラルドの力でパワーアップしたようだな。俺の力でちょっと遊んでやるか。」

スッ——

ハリネズミ——ダークは静かに片手をソニックに向けた。



そんなダークの姿に気づきもしないソニックは、エッグマンに最後に人差し指を立てた。

「覚悟しな、エッグマン!!!!」

ドンッ!!

ソニックは一気に力を開放した。

「くっ、もはやここまでか……」

エッグマンは目を閉じた。

しかし、そのまま何ら変化が起こることはなかった。

「……?」

エッグマンは静かに目を開けた。

シューウウウウウウ……

スーパーソニックの力が少しずつ弱まっていくなのが分かる。

「ぐっ……ぐぐぐっ……!!!!」

スーパーソニックは苦しげな面持ちだった。

「ソニック、どうしたの？」

テイルスがトルネードの操縦席から尋ねかけた。

「ぐっ……体が……動かないっ……!!」

スーパーソニックは苦しそうに言った。

「えっ!?!」

テイルスは尋ね返した。

ニイイツ！

それを聞いたエッグマンの表情に笑みが浮かぶ。

「ホ——ホホ——！！！情けないのうソニック！攻撃チャンスじゃ——！！！」

ウイイイイン！

ロボットの片腕がゆっくり上がっている。

「やめろ——！！！エッグマン——！！！」

ドガ——ン——！！

テイルスがミサイルを放ち、見事ロボットに命中する。

「ぎゃああ——っ——！！！」

ガシャ——ン——！！

ロボットは体制を崩した。

「くぅぅ！邪魔な子ギツネめぅぅ！！！」

エッグマンはギリギリと歯軋りしながら言った。

「大丈夫！？ソニック——ク？」

ソニックを振り返ったテイルスは驚いて声が出せなかった。

ソニックは頭を抱えている。

「ぐううっ！うおおおおおおおっ！！！！！」

ビカ————ン！！

スーパーソニックの叫びと共にソニックの体から七つのカオスエメラルドが抜け、本来の青いハリネズミの姿に戻った。

「なぬっ！？」

ソニックと対峙しているエッグマンすら自らの目を疑った。

ドサッ！

ソニックは地に落ちその場に倒れた。

「ハア——ハア——」

ソニックは両手両足を地面に付けたまま荒呼吸をしている。

コオオオオッ

そして上空には異様な光を放つカオスエメラルドが浮かんでいた。

「何がどうなっておるのじゃ?!」

エッグマンがそう言った瞬間





## TARGET

「んなっ!？」

ようやく呼吸が整ったソニックは驚いていた。

———なんだったんだ……？

そう思いながら分裂し七つに戻り、まともらない動きで浮揚するカオスエメラルドに近寄った。

その瞬間

ビカアッ!!

カオスエメラルドが眩い光を放った。



「っな!？」

ソニックは思わず足を止めた。

「ソニック、危ない!!」

ヒュンッ!

テイルスが叫んだ瞬間、カオスエメラルドの一つが猛スピードで突っ込んだ。

「のわっ!？」

バツ!

ソニックはギリギリでそれをかわした。

「くっ、SAFE!」

バツバツ!!

ソニックは大きくバックステップをし、カオスエメラルドから離れた。

「ど、どうなってんだ？」

コオオオオオツ――

異様な光を放ち続けるカオスエメラルドに視線を投げかけながらソニックは呟いた。

ヒュッ！

そして再び一つがソニックに襲いかかった。

「くっ！」

ソニックはまたもギリギリでかわした。

「くそ、何てスピードだ！」

バツ！

再び大きくバックステップをしながらソニックは苦々しげにそう呟いた。

「ソニック、乗って——!!」

トルネードがソニックに近づいてきた。

その時——

ビカアアッ!!!

カオスエメラルドは再び強い閃光を放った。

「ま、マズい!! テイルス! 来るな——!!」

ソニックは叫んだが——————最早手遅れだった。

バキィッ!!

カオスエメラルドが再び肉眼で見えないほどの速さで凝結し――  
――トルネードを貫いた。

「なっ!!!?」

ヒュルルル――

ソニックの叫びと共にトルネードは回転しながら墜落し、

ドガ――――ン!!!!

そのまま爆発した。

「テ、テイルス――――!!!!!!!!!!」

ソニックは叫んだ。

墜落した所から大きな黒煙がもくもくとあがっているのが分かる。

ドガァッ!!

「ぐあっ!!」

トルネードの墜落に気を取られている隙に、カオスエメラルドの一つがソニックの腹に猛スピードで突っ込んだ。

「ぐっ!!」

ソニックは腹を押さえながら片膝をついた。あまりの激痛に一瞬頭が真っ白になった。

「く……このままじゃられる——!!」

ソニックがそう思った瞬間——

ビュンッ!!

「のわぁっ!?!」

黒い影が突然現れ、ソニックの腕を掴んだ。

そのまま猛スピードでどんどんカオスエメラルドから遠ざかって行く。

「だ……誰だ?」

空いている方の手で痛みの取れない腹を押さえながら、ソニックは自分の腕を掴んでいる者を見た。

ソニックの腕を掴みながら音速で走る……いや滑走する者の正体は……

「お前は————シャドウ!?!」

彼に瓜二つの黒いハリネズミ————シャドウ・ザ・ヘッジホッグだった。

「……………」

表情一つをも変えることなく、シャドウは無言で滑走し続けた。

バツ！！

シャドウは大きく跳躍し、エッグマンの基地から脱出した。

ストツ――

軽やかに着地し、そのまま再び滑走しはじめた。  
その地を滑る音は、まるで氷の上を滑るアイススケートの様な音だった。

基地から大分離れた所でシャドウは徐々にスピードを落とし、

ドサツ！

「おわっ！」

シャドウは乱暴にソニックの腕を離した。

ソニックはバランスを崩し地に倒れた。

[.....]

ド  
シ  
ユ  
ツ  
！

相変わらず無口のままシャドウは猛スピードでどこかに走り去り、あつという間に姿が見えなくなった。

「シャドウ……」

ソニックはシャドウの消えていった方向を見ながらそう呟いた。

.....

「……くくくくく……ハ——ツハツハツハ——！！！！！」



上空からソニック達を見下ろしていたダークは突如高笑いをした。

「とうとう見つけたぞ……シャドウ・ザ・ヘッジホッグ!!!!!!!!!!」

ドギョーンッ!!

ダークは目にもとまらぬ速さでシャドウを上空から追跡した。

## “ONLY” VS “ULTIMATE”

「なにいつ！？テイルスが！？」

ソニックから一部始終を聞いた赤いハリモグラ——「ナックルズ・ザ・エキドゥナ」は驚き目を見開いた。

ソニックはその後ナックルズを訪ねていた。

とある特別なエメラルドを守りながら暮らすナックルズはソニックの昔からの喧嘩友達であり、良きライバルである。

ナックルズの住んでいる場所は森の中にある、少し神秘的な感じを受ける場所だった。

そんなナックルズの問いかけにソニックは目を閉じながらゆっくり頷いた。

「……くっ！！」

ナックルズはソニックに背を向けた。

「暴走したカオスエメラルドを止めるためにマスターエメラルドが必要なんだ。貸してくれないか？」

ソニックは尋ねた。

カオスエメラルドの暴走を止める力を持つマスターエメラルド――

――

――あれを使えばカオスエメラルドを止められるかもしれない。

ソニックはそう考えていた。

「……それがな……」

ナックルズはソニックに背を向けたまま話を続けた。

????????????????

シャドウは荒野を滑走していた。

見渡す限り茶色っぽい風景が広がっている。

周りは茶色く大きな岩がゴロゴロ転がっており、植物は見当たらず生物の気配は無かった。

「……………」

シャドウは滑走を続けると同時に——「何か」の気配を感じていた。

——キッ！

シャドウは急に立ち止まった。

バッ！

振り返ったが、そこには相変わらず茶色い風景が広がっているだけだった。

「さっきから僕のあとをつけているのは誰だ？」

彼はまるで独りごとの様に呟いた。

「……………」

シャドウは遥か上空を見上げた。

澄んだ青空に様々な大きさの白雲が散らばっている。

スッ——

シャドウは片腕をもう片方の肩の方に伸ばした。

ババババッ！！

シャドウの手に黄色い光が集まる。

ビュンッ！！

「カオススピア!!」

シャドウが遙か上空に向かって腕を振ると、その手から黄色い光の矢が勢いよく放たれた。

ドドドッ!!!

光の矢は何も無いはずの上空で何かに当たり爆発した。

空は灰色の煙に満ち溢れた。

「!?!」

徐々に煙が引いてきたところでシャドウは驚いた表情を見せた。

「……ほう、俺に気づくとは……流石だなシャドウ。」

煙の中から宙に浮遊する黒いハリネズミが現れた。

「メファイレス……? いや違う。君は誰だ? 何故僕を知っている?」

シャドウは黒いハリネズミに人差し指を向けながら尋ねた。

スッ――

黒いハリネズミはゆっくりと下降し、地に降りた。

「……俺はダーク。ダーク・ザ・ヘッジホッグだ。この世で唯一の究極の存在だ。」

そしてゆっくりと告げた。

「……何だそれは。僕の真似のつもりか？」

シャドウは蔑むように言った。

「……いや、真似などでは無い。これから貴様を消し、俺が真の究極生命体になるのだから……」

「……何だと？」

シャドウは気にもとめるようなこともせず、静かに聞き返した。

「……貴様に手加減は要らないな。最初から全力でかかせてもらおう。」

スッ——

ダークがゆっくり両腕をシャドウに向けた。

「……君が僕に何の用だが知らないが、今消されるわけにはいいかな。」

こちらもこの究極の力——全力で行かせてもらおうぞ。」

シャドウも身構えた。

10mほど離れた場所で対峙している二人の間に鋭い沈黙が走る。

ヒュオオオオオオオオオオツ！！

そして二人の間に一風の風が吹いた。



ドンッ！！！！

二人は一気に力を開放した。

シャドウは神々しい金色に光り、ダークは禍々しい闇色に光った。

「ハアッ！！」

ドンッ！！

ダークの両手から黒く巨大な閃光が放たれた。

バツ！

シャドウは大きく跳躍し閃光をかわした。

ドガ————ン！！！！

閃光は地に突き刺さり、巨大な穴を開けた。

シュバツ！！

シャドウは宙で蹴りの体制をとると、ダークめがけて勢いよく急降下した。

ドガッ!!

鈍い音が響く。

「チッ!」

シャドウは舌打ちをした。

シャドウの重い一撃を、ダークは軽々と片腕のみで受け止めていた。

「無駄だ!」

バキッ!

ダークは無造作にその腕を振り、シャドウを弾き飛ばした。

ズザッ!

ドンッ!

シャドウは空中で体制を整えてから着地し、一気にダークに肉薄し

た。

ドガッ!!

シャドウがダークに回し蹴りをしたが、またしてもダークの腕にガードされてしまう。

「ハアアッ!!」

ドガアッ!! バキィッ!! ドゴォッ!!

シャドウはそのままダークに凄まじい速さで攻撃ラッシュを続けた。

しかし、全てガードされてしまう。

バッ!

「なにっ!?!」

シャドウがダークの顔めがけて手刀を放ったが、かわされた挙句その腕を掴まれた。

「タアッ!!」

シュバッ!!

ダークはシャドウを思い切り上空に投げ飛ばした。

「クッ！」

シャドウは再び宙で体制を整え、地上にいるはずのダークの方を見た。

「!？」

しかしそこにダークはいない。

「——こっちだ。」

頭上で声がした。

「!？」

顔を上げたシャドウは自らの目を疑った。  
そこに両腕を頭の後ろで組み、振り上げているダークがいたためである。

バキィッ!!

「ぐあっ!!」

ダークは両腕を振り下ろし、シャドウを地上に叩き落とした。

スタツ!

シャドウは無事に着地し、ダークを睨みつけた。

バツ!

「カオススパア!!」

ドドッ!!

シャドウは再び光の矢をつくり、ダークめがけて放った。

再度それは命中し、宙で爆発を起こした。

煙が引いてくると、防御体制でかまえているダークの姿が朧気にだ  
が露になった。

そんなダークを、シャドウは静かに睨みつけていた。

「……今度はこっちから行かせてもらおう。」

ドンッ！！

ダークは空中から一気にシャドウに肉薄した。

「喰らえ！」

ダークはシャドウの顔にパンチした。

ガッ！！

シャドウはそれをガードした。

「まだまだだ。」

バババババババツ！！！！

ダークは目にも見えぬ速さでシャドウに連続的にパンチをした。

ガガガガガガッ！！

シャドウは再び全てガードした。

「フッ、面白い。」

バッ！

ダークは一度シャドウから離れ、距離をとった。

「「ハアッ！！」」

二人は同時に叫び、一斉に肉薄した。

シュンッ！

そして二人が衝突する瞬間、双方の姿が消えた。

ドガンッ！！

虚空で大きな鈍い音が響く。

ドドドドドドッ！！！！

鈍い音はその後数回に渡って響き、宙に衝撃波となっては消えた。

そう、二人が宙で打ち合っているのだ。肉眼では見えないほどの速さで――。

音速を超えるそのスピードに姿を確認することが出来ない。

パッ！

再び二人の姿が現れると、互いに距離をとった。

スタッ！

二人は同じタイミングで着地した。

再び二人の間に沈黙が走る。



「……流石だな。だがこうでなくては面白くない。」

ダークが表情一つも変えず、静かに告げた。

「……」

シャドウは何も言わず、ただダークを睨んでいる。

「……一つ面白い物を見せてやろう。」

スッ——

ダークは静かに片腕を空に向けた。

「……？」

シャドウは空を見た。

遙か上空から何かが降りてくる。

その数は七つ。

「バカな……カオスエメラルドだと!?!」

シャドウは叫んだ。

「……そう、カオスエメラルドだ。

こいつは俺の好きな様に動く……この様にな。」

スッ――

ヒュッ!

ダークが腕をシャドウに向けると、カオスエメラルドの一つがシャドウに猛スピードで突っ込んだ。

「クッ!」

シャドウはギリギリでかわす。

「!?!」

その刹那、ダークがシャドウに肉薄した。

バキィッ!!

「ぐはあっ!!」

そのままシャドウを殴り飛ばした。

ズザザザアッ!!

シャドウは地面に叩き付けられた。

「……くっ」

シャドウは立ち上がるが、再びカオスエメラルドがシャドウに襲いかかる。

「……さあ、どうするシャドウ？」

ダークは悠然としてシャドウに問いかけた。

## **&quot;Two Heroes” VS ”ONLY”**

「マスターエメラルドが盗まれた!？」

「ああ、何者かにな。」

驚き声を上げるソニックを尻目に、ナックルズは落ち着いた様子でそう言った。

「じゃあまずはマスターエメラルドを探すのが先だな。手掛かりは無いのか？」

ソニックの提案もむなしく

「無い。」

ナックルズは表情を変えずそう断言した。

「……hum。しょうがない、ちゃっちゃと探しに行くとするか。」

ソニックは呆れたように肩をすくめながら言った。

「――俺も行く。今回の落度は俺にあるからな。」

ナックルズもばつが悪そうにソニックにそう言った。

「OK。Get ready…」

バッ

「ggoo!!」

ダッ!!

ソニックとナックルズは勢いよく走り出した。

????????????????

ドガアッ!!

「グハアッ!!」

顔面に激痛が奔る。

ズザザザザアッ！！！！

そして地面に叩きつけられる。

もう何度奴の攻撃を受けたか――――

シャドウはよろよろ立ち上がりながら思っていた。

彼の体は既に傷だらけだった。

距離を取ろうとしてもダークは必ず先回りをしている。  
逃げるつもりはなかったが、絶対に逃げられない状態だった。

ヒュッ！

そして再びカオスエメラルドが目の前に飛んでくる。

「くっ……………」

立っているだけでもやっとな状態で必死に避ける。

「ハアッ！」

そして再びダークが自分に向かって攻撃を仕掛けてくる。

ドガアッ！！！！

今度は腹部に激痛が奔る。

「ぐあっ！！」

バッ！

吹っ飛ばされながら体制を整えたが、着地と同時に膝を付く。

「くっ……」

ぜえぜえと荒呼吸をしながら顔を上げる。

「！！」

目の前で奴が——ダークが片腕をあげている。

ドンッ！！！！

ダークが腕を振り落とすと同時に————目の前が真っ暗になった。

？？？？？？？？？？？？？？

「ヒュ〜♪絶景だねえ！」

ソニックは軽やかに走りながら、辺り一面に広がる茶色っぽい風景を見回した。



「こんな所、初めて来たな……」

ナックルズも同じように走りながら、落ち着いた表情で独りごつ。

「天気も良いし、最っ高だねえ♪」

ソニックは心なしか楽しげに見えた。

「お前なあ……それにしても、マスターエメラルドは一体どこにあるんだ……?」

ナックルズはそんなソニックの楽観的な様子に呆れつつ、周りを見渡していた。

——————キキッ!!

ドンッ!

「おわっ!?!」

ソニックが急に立ち止まったため、ナックルズはソニックに正面から激突してしまった。

「おいソニック！急に止まるな！」

ナックルズは真っ赤になった鼻を押さえながらソニックに怒鳴った。

「……なあ、あれシャドウじゃないか？」

ソニックが前方を指さしながら言った。

「あっ？」

ソニックが指差した方を見ると、遙か遠くに二つの黒い影が見えた。そのうち倒れている方の姿は、シャドウのように見える――。

「……大したこと無かったな……シャドウ・ザ・ヘッジホッグ！」

ダークは目の前に伏しているシャドウを見下ろし、蔑むように言った。

スッ――――

そして徐に片手を上げた。

ギョオオオオオオオオ！！！！

その手に紫色の閃光が集まってくる。

その時だった。

「シャドウ！！？」

シューウウウウウ……ン

ダークは徐々に力を弱めながら、突然掛けられた声の方へ振り返った。

そこにいるのは、青いハリネズミと赤いハリモグラ。

「……何だ貴様らは？」

ダークは腕を下ろしながら尋ねた。

「俺の名はソニック！ソニック・ザ・ヘッジホッグだ！」

ソニックはダークに鋭い眼差しを向けながらそう叫んだ。

「俺はナックルズ。」

ナックルズも同じようにダークを睨みつける。

「……俺の名はダーク。ダーク・ザ・ヘッジホッグだ。この世で唯一究極の存在だ。」

「What!？」

ソニックは思わず聞き返した。

（——こいつ、シャドウに似ている……。）

その気高く重々しい物腰も他を圧倒する気迫も、シャドウを彷彿とさせるものであった。

「そして……エメラルドを操る者だ。」

「!?!?!?!?!」

ソニックとナックルズの表情が一変し、驚いた面持ちに変わる。

「まさか、あの時カオスエメラルドの様子がおかしくなったのはお前の仕業か!？」

ソニックは尋ねた。

その言葉に、ダークは怪訝そうに首を傾げた。

そして少し前に見た景観を思い出し、不敵な笑を浮かべる。

そう、彼は見ていたのだ。

あの時——基地でのエッグマンとのあの一戦を——。

「……そうか貴様、どこかで見たことがあると思ったらあの時のハリネズミか。」

「……やっぱりお前の仕業なんだな!？」

ソニックの表情がより険しくなった。

「ああ、俺がやった。俺の能力の腕試しにな——。」

ダークはゆつくりと告げた。

「まさか、マスターエメラルドを盗んだのもお前か!？」

ナックルズがそう尋ねると、ダークは曇った空を見上げながら呟くように言った。

「…………マスターエメラルドか、あれは俺にとって邪魔な存在だ。」

「だったらどうした!!」

ナックルズは業を煮やしてそう叫んだ。

そんなナックルズにダークは言い放つ――。

「見つけ次第排除する。」

「なっ、なんだと!?!」

ナックルズの表情が一変し、冷や汗が頬をつたった。

ザッ!

ソニックは一步前に出ると、ダークを指差し言い放った。

「エメラルドを止めるんだ!?!」

ダークは動じる様子もなく、不敵に囁いた。

「……止められるものなら、止めてみるがいい。」

スッ——

ダークは戦闘体型に入りながら言った。

「ああ、分かったぜ！！ナックルズ、遅れるなよ！」

ソニックも身構えた。

「ああ。」

同じくナックルズも。

両者の間に数秒の沈黙が訪れる。

「Ready……………」

ソニックはまるで短距離走の選手のような構えをとった。

「GO!!!!!!!!!!」

ギュンツ!!!!!!!!

ソニックは一気にダークに肉薄した。

「ハアアッ!!」

ドカアッ!

そのままダークに鋭い蹴りを放つ。

「甘いな!」

ガッ!

ダークは怯むことなくその足を掴んだ。

「なっ!?!」



「うおおおおお!!」

それに気づかないナックルズは一心にダークに向かって疾走している。

「ハッ!!」

ブンッ!!

ドガァッ!!

ダークはソニックをナックルズに向かって投げつけ、二人は弾き飛ばされた。

「「うわぁっ!!」」

ズザァァァ!!

「……ッテテテ!」

「遅い」

「!?!」



「そくでもないみたいだぜ？」

ソニックがそう言った刹那、ナックルズは前方を見やった。

「んなっ!？」

ナックルズは目を疑った。

そこに片手をこちらに向けているダークがいたためである。

「……消えろ」

ドンッ!!

ダークの手から黒い閃光が放たれた。

バッ!

「ハアッ!!」

当たる直前にソニックはナックルズを連れて跳躍し、閃光をかわす。

ドガーーーーン!!

閃光が地面に突き刺さり爆発を起こし、地に大きな穴を開けた。

「なかなかやるじゃん。」

ソニックは跳躍したままその穴を見、乾いた口笛を吹いた。

バツ!!

「ソニック、上だ!!!」

ナックルズが叫んだ。

「おわっ!?!」

ソニックは顔を上げ目を見開いた。

そこにダークが両腕を組み振り上げていたからである。

「ソニック! 頭を下げろ!!!」

「お、おいナックルズ!?!」

ソニックが聞き返したが答える間がなかった。

「落ちろ！」

ガッ！！

ダークの言葉と共に腕が降り下ろされるが、ナックルズがその重い攻撃を自分の拳で受け止めていた。

「……ほう」

ダークは驚いたように言った。

「く、くく……！！！」

しかし、ナックルズ表情からは限界が伝わってくる。

「おらあああああ！！！」

ドゴォッ！！！！

ナックルズはそのままダークを弾き飛ばした。

ヒュウウウウウ……

ドガ————ン！！！！！！

ダークはガードしたがそのまま吹っ飛ばされ、背後にあった大きな岩に突っ込んだ。

スタッ！

ソニックとナックルズは地に着地した。

ドゴオオッ！！！！

それと同時にダークの突っ込んだ巨大な岩に亀裂が走り、粉々に砕けちった。

「！！」

二人は驚愕した。

その中から傷一つついていないダークがゆっくりと姿を現したからである。

「……なかなかやるな」

スッ———

不気味に笑いながらゆつくりと地に舞い降りた。

ソニック達は咄嗟に身構えた。

「……まずはお前だ」

ダークがソニックを睨みながら左右に大きく両手を開いた。

シュオオオオオッ！

その両手から黒い光が溢れ出、彼の頭上に集まる。

そしてそのまま小さな球体になった。

フオオッ！

球体がダークの片手の上に浮かぶ。

「くらえ」

バツ！

ヒューーーーン！！

ビタッ！

「！？」

ダークがその腕を振ると、球体がソニックに向かって目にとまらぬ速さで飛空した。  
そしてそのままソニックの腹にくっついてしまう――。

「な、なんだこれ！？」

ギギギギッ！！

球体を剥がそうともがくも、まるでとてつもない粘着力を持つスライムのように取ることが出来ない。

「くそっ取れない！」

どんなに力を込めても球体は全く剥がれる気配がない。  
流石のソニックも焦燥に駆られた。

「チッ！ソニック、早めにケリをつけるぞ！」



ナックルズはそう言い、腕を振り上げながらダークへ突っ込んだ。

「うおおおおおっ!!!」

ドゴーーーーン!!

そのままナックルズはダークの顔を渾身の力を込めて殴りつけた。手には確かな感触を感じた。しかし――

「……なっ!？」

その一撃を受けても一向に動じず、それどころか悠然と彼に手を向けてくるダークに彼は驚嘆した。

(――ば……バケモノか……)

驚きと恐怖が混じり合った混沌とした心持ちで、しかし彼は漠然とそう思った。

「邪魔だ」

その言葉と共に、ナックルズに向けている掌に紫色の光が集まる。

ギュンッ!!

「ナックルズ!!」

バツ！

「おわっ!？」

ソニックが猛スピードで走ってきてナックルズの腕を掴み跳躍した。

カッ!!

下ではダークがさっきまでナックルズが居た場所に紫色の太い閃光を放っていた。

（あと少し遅れていたら――）

そう思ったナックルズの額に汗が流れる。

ダークは空中の二人に冷たい眼差しを向け、呟いた。

「……ちよろちよろとすばしっこい奴め……」

「へへっ！それが俺だからな！」

ソニックは得意げに言った。

スッ――――――

ダークは両手をソニックに向けた。

「なら、これはどうだ——？」

シュオオオオ！！

ダークの周りに黒煙が集まってくる。

ジャキッ！！

そしてそれは硬化し何本もの黒い剣へと姿を変えた。

バツ！！

ダークの腕が降り下ろされると同時に剣が一斉にソニック達に襲いかかる。

「Here we go！！」

ヒュンッ！ヒュンッ！ヒュンッ！

ソニックは空中を移動し、剣を次々と避けて行った。

「へへっ、どんなもんだい！」

ギョーンッ!!

そのままソニックはダークに向かって猛スピードで突っ込んだ。

ドゴォンッ!!!

鈍い音が響き、ダークの体が吹っ飛ばされる。

「チッ!」

ダークが舌打ちをし、空中で体制を整えようとした時――――

「でえりゃああっ!!!」

「なにっ!?!」

ドゴォォォン!!!

「ぐっ!」

いつの間にか先回りをしていたナックルズに殴り飛ばされ、再びソニックのもとに飛ばされる。

「行くぜ!」

キユイイイイイン!!!!

ソニックが勢いよく回転をし、

「ハアッ!!」

ドガアッ!!

そのまま回転の力を利用し、鋭い一蹴でダークを地面に叩き落とす。

ドガーーーーン!!

ダークは勢いよく墜落した。

ババッ!

すぐさまダークは立ちあがり体制を整えた。

——ギロツ!

ソニックを睨むかと思わせたその刹那——

「……くつくつく、ハーツハツハツハ！……！！」

突如高笑いをした。

「な、何を笑ってやがる！？」

ナックルズはダークを睨みながら叫んだ。

「……気づかないのか？あのハリネズミの異変に。」

ダークはナックルズに一瞥を投げかけながら、可笑しくて仕方ないように言った。

「なんだと！？」

その言葉を聞くや否や、ナックルズはソニックを見た。

ドサッ！！

ナックルズは絶句した。

ナックルズの視線を受けたソニックが力なく地面に落下したためである。

「お、おいソニック！！」

バッ！

ナックルズは慌ててソニックに駆け寄った。

「おい！どうしたんだよ！？ソニック！！！」

ナックルズはソニックの体を揺さぶるも、彼に何ら反応はなかった。ただ虚ろな眼差しを虚しく宙に投げかけていることを除いては――。

そう、その姿はまるで電池の抜けたからくり人形のようなだった。

**&quot;Two Heroes” VS ”ONLY” (後書き)**

更新遅れました(汗) すいません m ( mあと1つお知らせです。

活動報告にも書きましたが、作者は現在テスト期間のため更新が遅くなるかもしれません(´;ω;、)  
誠に申し訳ありませんorz



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2548y/>

---

ソニック・ザ・ヘッジホッグ「エメラルドの暴走」

2011年11月27日19時53分発行